

研究種目：若手研究 B

研究期間：2006～2008

課題番号：18720030

研究課題名（和文）

モダニズム期日本の輸出デザインにみる造形思想の形成過程：国家の表象と「模倣」問題

研究課題名（英文）

Process of the Philosophical formation of Japanese Export Design in Modernism:
National Representation and the Issue of Design Copy

研究代表者

井田（菅）靖子（IDA(SUGA) YASUKO）

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：20312910

研究成果の概要：

本研究の目的は、モダニズム期（大まかに 1910 年代～1970 年代）の日本におけるデザイン思想の形成過程を、輸出デザインの理論と実践、G マーク制度の発足前後の国際的なデザイン問題、海外とりわけイギリスのデザイン論との関連性、から検証することであった。

国際性が特徴とされるモダニズム期を、国家の表象（ナショナル・プレゼンテーション）としての輸出デザインという「地域性」に重点をおいて、また国家間のデザイン論の交錯に着目して解明することにある。加えて当時の日本のデザイン活動を新たな「モダン・ジャポニスム」として捉える視点、その輸出政策について実際のデザインの図像分析を用いて質的研究を行う点、そして近代日本を国際的かつ視覚的にアピールしたモノの特性を需要と供給の両側面から解明する点、さらに、海外のデザイン論との関係に着目して解明する点、国家の表象に関して図像分析を用いて質的研究を行う点から研究調査を進めた結果、従来は見落とされていた輸出デザインとジェンダーの関連性に切り込むことができた。

また、『工芸ニュース』を創刊号より戦後まで調査分析し、「モダン・ジャポニスム」の議論に重要であると思われるテキストの抽出を行った結果、議論は 3 段階（19 世紀的ともいえる伝統的造形をさらに追求する初期、日中戦争から第二次世界大戦直後までつづく「東洋的」日本趣味の造形を追求する帝国主義的デザイン議論、そして 1950 年代を中心に改めて日本的造形をモダニティのなかに位置づける「ジャパニーズ・モダン」の議論）にわけて把握することができると判明した。また、この間にさまざまな意味づけを与えられた「工芸」という問題を多く含んだ言葉の意味の変遷も同時に考察した。さらに、一連のモダン・ジャポニスムを考察する上でとりわけ代表的にとらえられるのが竹材製品であり、それにたいする海外デザイナーの関心という外からの働きかけをうけて、日本国内での議論が熟していった様子も解明できた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	90,000	1,490,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：芸術諸学、デザイン史

1. 研究開始当初の背景

開国以来、わが国の輸出デザインは、国際的な競争力および国内の西洋化・近代化の表象を映し出してきた。モダニズム期のわが国の輸出デザインを考える際にも、国家の表象としてのデザイン活動は重要である。一方で国際市場で「売れる」デザインを追究した結果、モダニズム期を通じて日本による海外製品の「模倣」問題がイギリスから何度も厳しく指摘された。従来、Gマーク制度がわが国におけるデザイン意識の深化として捉えられ日本製品による「模倣」問題も1950年代を中心にこれとの関係で論じられるか、「模倣」でなく「創造」であったとする見方があった。しかし、20世紀初期より近代国家として新たな「伝統」を演出するため独自性のある工芸産業の発展を目標に掲げていた日本が、製品デザインの「模倣」に戦後まで無頓着でありつづけたとは考えにくい。また、Gマーク設置以降の1960,70年代まで「模倣」問題は頻繁に起こっており、Gマーク制度を到達点と見なすことは歴史的に困難である。更に、Gマークの概念には模倣問題をわが国に突きつけたイギリスがモダニズム期を通じて展開したグッドデザイン論が理論的にも実践的にも大きく関わっているため、国際的な影響関係を把握する必要がある。したがって20世紀初期からあらためて活発化した輸出用の工芸産業論や産業デザイン論を、戦前、戦後という分け方ではなくモダニズム期として一貫して捉え、欧米のモダンデザイン思想との連関を通して探る視点が、近代日本のデザイン意識の形成過程を検証する際に重要となる、という観点から、本研究を行った。

2. 研究の目的

1) 19世紀のジャポニズムの興隆によりわが国は海外への工芸品、製品の輸出の道を確立した。20世紀、日本は自国の近代性を表象するデザインを、国立工芸指導所などの働きを通じていわば「モダン・ジャポニズム」として改めて積極的に海外に仕掛けていったといえる。そこで19世紀の欧米主導のジャポニズムから20世紀の「モダン・ジャポニス

ム」の表象への脱皮の成功（竹製家具）と失敗（金唐革紙）の事例を比較検証し、素材と形態にみる「モダン」な日本の独自性の演出と機械化による工芸的価値の変化との関連を探り、国家の表象としての「モダン・ジャポニズム」の構築過程の解析を行った。

2) モダニズム期を通して、イギリスとのデザインの「模倣」問題が存在した。これは長年イギリスの主要産業であったキャリコ・プリント製品を巡って1920年代から始まり、戦後の1950年代に大きく批判が盛り上がったが、そこには多分にイギリス固有のデザイン論の発展が影響していた。その結果、デザイン全般の問題として捉えられるようになり、わが国のGマーク制度を生んだ。しかしGマーク制度発足よりむしろ1970年代に通産省がイギリスの産業デザイン・カウンスルでの日本デザイン展の開催を区切りに模倣問題は収束している。この間にわが国のデザイン思想あるいは造形感覚はどのように変化を遂げたのかを日英双方の史料をもとに検証した。さらに、日本からアメリカに渡ったデザイナーの体験がいかに関連していったかを検証した。

3. 研究の方法

1) 国家の表象としての「モダン・ジャポニズム」の構築過程の解析を行う。主に日本側の史料を中心とした(A) 国家の表象としての「モダン・ジャポニズム」検証、その構築過程の解析の研究を進めた。そのために、研究上必要とされる関連資料を購入し、文字史料、視覚史料の収集、およびデータベース作成を行った。ある程度の量産が可能な輸出産業としての工芸や製品デザインを論じた国内の『工芸ニュース』を中心にわが国の工芸・産業デザイン関連の雑誌を検証し、そのなかで日本のモダニティを反映したオリジナリティがいかに関連して追究されていたかを抽出した。また同期間中に開催された国際博覧会での海外評、新聞評を収集し、日本側の思惑と海外での日本の輸出デザインの受容との関連性・相違性を検証した。

2) イギリスとのデザインの「模倣」問題

の歴史的意味の解明を行う。デザインの模倣問題は、まず日英間で、日本がアジアへ輸出したキャリコ・プリント製品から始まった。これは 1920 年代から問題となり、戦後の 1950 年代に改めて大きく批判が盛り上がった。その結果として G マーク制度が発足したが、すぐにその成果は見られなかった。わが国のデザイン観の成熟を対外的に示したのは G マークではなく、1970 年代の通産省がイギリスの産業デザイン・カウンスルにての日本デザイン展の開催であったことを実証するために日英双方の資料にあたった。

3) 両側面からの研究結果を総合的に比較検証した。そこから、モダニズム期日本の輸出デザインに日本の造形思想の形成がどのように反映されていたのかを、「工芸」や「日本趣味」などのキーワードをとおして総合的に検証した。

4. 研究成果

とりわけ大きな成果は、自由学園の卒業生で工芸デザイナーである一人の女性に焦点を当てたことである。1930 年代には彼女はヨーロッパへ派遣され、西洋のヴィジュアル・カルチャーの新たな側面を学んで帰ってきた後、同校の工芸研究所で活躍した。彼女はここで教鞭をとり、海外の国際展覧会に作品を出品している。今回の研究により、ヨーロッパのモダニズム的デザイン教育を受けた彼女の経験を、両大戦間期の日本における工芸、フェミニズム、そしてナショナリズムという三方向と関連させて論じ、そこから、国家産業としての工芸と国家が西洋にあらためて新たなジャポニスム、すなわち「モダン・ジャポニスム」とでもよべるものを引き起こそうとしていた戦略を明らかにした。

また、『工芸ニュース』を創刊号より戦後まで調査分析し、「モダン・ジャポニスム」の議論に重要であると思われるテキストの抽出を行った結果、議論は 3 段階（19 世紀的ともいえる伝統的造形をさらに追求する初期、日中戦争から第二次世界大戦直後までつづく「東洋的」日本趣味の造形を追求する帝国主義的デザイン議論、そして 1950 年代を中心に改めて日本的造形をモダニティのなかに位置づける「ジャパニーズ・モダン」の議論）にわけて把握することができると判明した。また、この間にさまざまな意味づけを与えられた「工芸」という問題を多く含んだ言葉の意味の変遷も同時に考察した。さらに、一連のモダン・ジャポニスムを考察する上でとりわけ代表的ととらえられるのが竹材製品であり、それにたいする海外デザイナ

ーの関心という外からの働きかけをうけて、日本国内での議論が熟していった様子も解明できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 菅 靖子 「今井和子と自由学園工芸研究所にみるモダニズム期日本の工芸産業」、『デザイン学研究』日本デザイン学会、査読有、第 54 巻第 2 号、2007 年、pp.9-18. (日本デザイン学会年間論文賞を受賞)

② Yasuko Suga ‘Modernism, Nationalism and Gender: Crafting ‘Modern’ Japonisme’, *Journal of Design History*, vol. 21 No. 3, 査読有、2008 年、pp. 259-275.

③ Yasuko Suga ‘Invention of ‘Modern’ Japonisme: national representation through ‘Sangyo Kogei’’, *Proceedings of International Conference of Design History and Design Studies 2008*, 査読有、2008 年、pp. 64-67.

[学会発表] (計 1 件)

① Yasuko Suga ‘Invention of ‘Modern’ Japonisme: national representation through ‘Sangyo Kogei’’, International Conference of Design History and Design Studies 2008, 大阪大学、2008 年 10 月 24-26 日

[図書] (計 1 件)

① Toni Huberman, Sonia Ashmore and Yasuko Suga eds., *The diary of Charles Holme's 1889 visit to Japan and North America : with Mrs Lasenby Liberty's Japan : a pictorial record*, Forkestone: Global Oriental, 2008. 240 ペジ.

[その他]

・イギリスのチェルシー芸術大学を中心とした研究プロジェクト ‘Forgotten Japonisme’ に

参加、クローズド・ワークショップで二度の研究発表を行った（‘Modern’ Japonisme as a National Strategy: Japanese design, 1920s-1950s’ (2008年5月)および’Kogei Shidosho (Industrial Art Research Institute) and the Changing discourse of Japonisme’ (2008年9月)

・研究成果の一部を、服飾文化学会の2007年5月の大会の基調講演にて発表した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井田（菅） 靖子

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：20312910